念を去らすには、まづその巣鶏とは如何なるものであるかといふことを知らねばならぬ、世間の初心者には、巣鶏を病鶏と誤認り、又病鶏を巣鶏であると誤識て居る者が尠くないさればどこの巣鶏とは如何なる狀態をなして居るやといへば、巣念ある鶏は、頸羽を膨かし背羽を逆立て、翼羽を左右に恰も物を包むが如き形狀に擴げ、而して首を縮めてコッ〳〵と切言葉の啼き聲をなして居る、夫故この狀態を現はすものは、直ちに巣立せしむるの必要即ち巣念を去らしむるのである、仍でその方法としては、その巣鶏を丈低き籠に伏せて置くが最も便利である、これはその巣鶏を尙ほも地に伏せ置けば、二三日間を經ると、容易に巣立ちするものである、けれども大養鶏家にては、多數の巣鶏あるものなれば、一々それを籠伏せにするといふことは、甚だ手數と費用と要するものである故、之等の鶏は見付次第に捕へて、直ちに他の鶏舍に收容する、而してその巣鶏を入るゝ鶏舍は、光線を導入して明るくいたし、少しも暗き處のなき樣にいたして置く、又その舍内には、産卵箱及び砂箱を初め、莚等を悉く除去して、巣鶏ばかりを入れ、而して雄鶏の勇健なるを數羽放ちて置く、斯くいたして置けば、巣鶏は座すべき適當の場所なく、且又雄鶏に追ひ廻はされて、數日のうちには巣念を去るものである、それからその巣念を去りし者は、前記の狀態を脫するによつて、識別し得るものである、仍で巣念を去りし者は、再び前の鶏舍に還すのである、けれども茲に注意すべきことがある、それは鶏を一舍に收容して、又それ〳〵元の鶏舍へ還すことは至極困難である。その譯は、鶏は元は何番鶏舍にありしやを知ることが出來ないからである、故に此等の憂のないために、豫めその鶏の脚に番號金を箝めて置けばよろしい、即ち一號より三十號迄は、一番鶏舍、四十號より六十號迄は二番鶏舍とするが如く、その數に應じて各舍の鶏數と其番號とを明瞭にいたして置けば便利だ、尙又鶏の年齡はその番號金の種類によつて區別するもよろしい、例へば亞鉛製のものは、昨年春生れのもの、眞鍮製のものは、同く秋生れの者に箝めるといふ風にする、又巣鶏の狀態をなすものにて、産卵するものもある、此等の鶏は、腹中に卵を持つて居るが故に、決して普通の巣鶏と同一の取扱をいたしてはならぬ、その理由は、前記にも述べたるが如く、座する場所だになき舍内にこの鶏を收容する時は、鶏はその卵を啄き喰ふて、終に啖卵癖を起すからである。されど如何に巣鶏の狀態をなすとも、その産卵するや否やを確

めねばならぬ。これを鑑定するには、まづその鶏を捕え、その臀部の上部即ち、左右の尻骨盤の間を指にて試みる時は、手に堅く卵の觸るゝことを感ずれば、尚ほ産卵するものである。

斯くの如き鶏は、直ちに普通の鶏舎に入れ置きて卵を産ませ、それより後ちに巣鶏の鶏舎に入れねばならぬ。然るに從來巣念を去らしむる手段としては、鶏を水中に浸し、或は兩足を縛りて逆に釣り下げ、或は鈴をつける等いろ〳〵になすものあれども、之等は何の効もなきことにて、反つて鶏に病症を惹き起させるものである。鶏を水中に浸す時は、鶏體又は羽毛を濕潤ならしめるがために、感冒に罹り、それより幾多の病症を誘起す、又逆さに吊るすことは、甚だ殘酷極まる行爲にて、鈴をつける等は滑稽至極のことにて、これらの方法は、いづれも害ありと雖も決して寸効もないことであるから、よく注意すべきである（松澤淳水氏説）

（七）卵の貯藏法

種卵の時に述べたるが如く、箱は縦一尺六寸、横八寸、深さ二寸二分の長方形にして其の内部を薄板にて五十にしきり、一箱五十個入に作り、一畫一個宛三四寸方形の古新聞紙を纏ひ、卵の丸く太き方を下に、長く尖れる方を上に卽ち卵を竪に容れ販賣の爲め取出すまでは土藏又は座下の如き冷涼たる土間に十箱内外を一と重ねとして貯藏して、手を觸れないのである。斯くして些の動搖をも嚴禁し置けば確かに八月末までは何等の異狀をも生ずることなく貯藏し得らるゝことは余の實驗にて明かである、此試驗は翌年の春期まで貯藏する見込を立てしも毎年梅雨末期の卵に拂底を告ぐる時期に於て販賣商人の要求大なりしため遂八月中に賣盡し、未だ一度も翌春まで持越したることはない、けれども兎も角八月末までの實驗にては決して異狀がない、併し茲に注意すべきは此貯藏卵を一度箱外に取出して流動する空氣に觸れ及び運搬は勿論些少にても動搖せしめたるときは其動搖を始めたるより五日以内は何等の異狀をも呈することはないが七日目に於て其卵子を器物の緣に當て打破りて器中に落せば卵黄破裂の氣味を呈し、十日目には必ず破裂して且全體に濁みを持ち水溶液を交ゆ、十五日目となれば生食する能はざるまでに最早腐敗度に陷つて居る

（八）配偶の適數

今、各先輩や學者間によつて研究せられたる配偶數を列擧して諸氏の參考に供することにする。これは雄鷄一羽に對して、雌鷄何羽を配偶させば良いか延いては雌何羽までは有精卵としての効果があるかといふ重要問題も、略これにて標準がつくであらう。

ハウダン種の一羽の雄鷄に雌鷄十羽
クレーヴ種の一羽の雄鷄に雌鷄八羽
カールス種　同
バフコーチンの一羽の雄鷄に雌鷄十羽
白色レグホンの一羽の雄鷄に雌鷄十四羽
スパニッシュの一羽の雄鷄に雌鷄十二羽
ブラマの雄鷄一羽に雌鷄十羽

ハンボルグの一羽の雄鷄に雌鷄十四羽
ポーランドの一羽の雄鷄に雌鷄十二羽
ゲームの一羽の雄鷄に雌鷄十羽
ミノルカの一羽の雄鷄に雌鷄十三羽
アンダルシヤンの一羽の雄鷄に雌鷄十四羽
プリモースロックの一羽の雄鷄に雌鷄九羽

（九）砂浴

凡ての鳥は身を清潔にするのと、ある生理的のために自然に砂浴又は水浴をするものである。これは一面から言へば羽毛の害虫を驅除する目的もあり、又それを未前に防備せんとする鳥の自衛手段ともみられるが、兎に角一日だつて適當の砂浴や水浴を怠るものがない。小鳥類にあつては水浴をせぬためにある病症を起して斃死するものがある。

鷄も又非常に砂浴を好むものである。春から夏へかけ、夏から初秋へ及ぼして、太陽

に灼けた砂や又は適度の柔かい砂を全身に浴びて清潔法を行ふ、これは養鷄家としては是非砂浴場を設備してやる義務があらう。特に砂箱を作つてこれに當てゝやるのもよいし、運動場の一隅に砂山を築いて置いてやるのも適法であらう。砂は普通の豆砂でも又粘土の粉にしたのでもよい。もし砂箱を作る時は、一匙の硫黄を混ぜてやると、適當の礦浴ができるし、害虫を防ぐにも効果がある。

（十）飛翔する鷄の手入れ

管理するのに困るのは、例の産卵用の飛翔する鷄である。時には半町も一町近くも飛ぶ強烈な羽翼を備へてゐるのもあるから、少こし油斷をすると全く手の附けられぬ面倒がかかるものである。

普通斯かる悪癖といふよりは飛翔性を帶びてゐる鷄には、その片羽を剪つて、飛翔させぬ樣にしてゐる樣であるが、これは啻に片羽を剝いで形態を醜くするだけにとゞまらず、其の抱卵の保溫上にも大きな影響があるから今少しく考察の必要があらう。

それで剪らずに飛翔を防ぐには、何うしても其の強猛な羽翼の力を矯正するのにあるから、まづ其の左右兩翼の端の羽毛を二三枚宛糸にて繫ぎとめておくのである、大抵の場合はこの方法で、高い飛翔を制止することができる。一方飛翔をとめるために、狹い柵飼ひをして、上位に金網を張りまはしてあるのをみることがあるが、それでは飛翔をとめて管理を安易にすることはできても、養鷄の第一義たる産卵とか豊肉とかいふ目的に伴はぬことになる、これも養鷄家として心得べきことであらう。

第八章　鷄の病氣

（一）何うして鷄に病氣が起るか

養鷄家にとつては、他の盜賊とか害敵とかに比較して悞ろしいのは鷄の病氣である。若し不幸にして此の病ひに襲はれると、みる〳〵うちに大切の資本を臺なしにして了つて、百日の説法屁一つの慘めな憂き目を見なければならぬ。しかも其の鷄の病氣が傳染性であ

ればある程、管理者が不注意であればある程に、損害の結果も多きくなるのであるから、時には養鶏家としての致命傷を蒙むることもある。

これは管理者が、鶏を自分のものだといふ觀念を、もつと強く意識したら、よし病症に陷つても適當の手當てはできるのであるが、不注意と不完全と、鶏に對する智識が豊富でないから、遂に養鶏家として失敗するのである。謂はゞ鶏自身の罪ではない。管理者の責任に歸着すべきである。

それで多く何ういふ場合に發病するかといふと、これも土地や氣候や管理方法やで一概に斷定はできないが、大抵の場合は左の様な時に發病さすものである。

(イ) 雨天續きの時、又は降らうとして非常に低氣壓が降下して二三日も曇天つゞきの惡寒を覺へる時。

(ロ) 盛夏炎熱の時、急に天候の不順で夜分など寒さを感じる時。

(ハ) 冬の尤も寒氣の烈しい時。

(ニ) 暴風雨の時。

(ホ) 陰晴定まらず、不順の時。

(ヘ) 他へ運搬する場合汽船とか汽車中の管理の時。

(ト) 管理を怠つた時。

(チ) 不潔な鶏舍に濕潤を來す時。

(リ) 餌料の急變、又は不消化物を與へた時。

(ヌ) 老病。

以上の樣に病症は天候に因ることが多いからこれが管理さへ十分なれば殆ど未然に防ぐことも出來るし、又發病なさなくてもよいのである。それを發病さすことは、直接にも間接にも管理の不注意といふことに歸着するのである。

それで若し鶏が病症にかゝつて、これを初期の間に快癒さすと、その經過も餘り著しくはないが、若し少こし手當が遲れると惡く行けば斃死するし、旨く行つても却々に快癒しても、それが原因となつて肉量は衰へ、質體は弱りて産卵や需肉用に効果が少なくなつて、結局は損害を招くことは理の當然である。だから養鶏家は何うしても、鶏の病症の一

端位ひは知つて置かねば飛んでもない不意の損害を招來する。尤も養鷄家として永い間從事してゐれば、自然に療法位ひは會得するものであるが、それも少こし手加減が相違すると、十分よくなるものでも七八分しか癒らないで、死ぬまで病鷄として手がかゝるし、賣らうとしても病鷄は安價で需肉用に嫌はれる、已むを得ず厄介もの扱ひにして結局は失ふて了ふのが落である。

自分が孵化さして、幼ないものから育てあげたものは、人一倍愛熱の念のかゝるのは人情である。といつてこの儘に過ぎては、養鷄の實質本位にもとるところもあるから、その點の程度問題を考へなければならない。養鷄が利益本位でなければ、それはもう問題外であつて、どんな贅澤な飼ひ方をして可愛がつてもよいが、營利的に飼養せんと思へば、やはり必要以外の贅澤は許されない。その程度内で以て飼養してやらねばならぬから、病症に罹つたといつても、獸醫へはしつて行つたり、多分の藥料の要ることは無論營利主義としては許されないのである。この意味に於ても養鷄家は是非鷄の臨時手當てぐらひに應じる知識と手腕を具へなければ可けない。

（二）治術に就て

病症にもよるが、その治療法は二種に分れる。これは人間でも同じことで、一つは劇藥を用ひて治療し、一つは劇藥を使用せずして治療の目的を達するものである。毒を以て毒を制するといふ言葉の通り、劇藥を使用する方法は頗る面倒で、時には一匙の加減で却つて鷄を盛り殺す樣な手落ちも生ぜぬとは限らないから、十分に緻密な用意が要る。普通には斯やうな危險な治療法はやらぬが、是非病氣によつては必要とするから、その點にも留意せなければならない。

（三）鷄病の豫防法

なるべく鷄を病ひに冒されぬ樣に注意するのは勿論であるが、一旦これに罹つたとしては已むを得ぬから十分の治療法を講じねばならぬ。それで毎朝鷄舍から放す時に、是非糞便とか又は鼻水を垂らし、羽毛をさかだてたり、頭部を下げたりして佇立してゐる鷄を注

意して發見してやらねばならぬ。その様な徴候のある鶏は、大抵は發病してゐる證據であるから……斯様な時には、いち早く其の病症のある鶏を他鶏と隔離して手當てをしなければならない。若しそれを怠る時は、傳染性の病ひであれば、忽ち全鶏群が冒されて、手當ても何にも出來なくなり果ては例の如く全部を失なうて了ふ恐ろしき結果となる。全ての病氣は其初期に治療しなければならないのは、自然の原理であつて、生物界を通じての必然の法則である。

されば成るべく該病に罹らぬ様に、細心の注意を日常に怠らねば、これ程豫防法として完全なるものはない。よし他の鶏舎に一大事變があつても、自分の管理内には、何の惧るべき病症も傳播しないものである。それに就て大に注意すべきは左の様な條項である。

(イ) 絶對に管理飼養法を怠つてはならない第一條件として鶏舎を濕地の土間などに作つては可けぬ、これは全ての病症を併發さし誘起せしむる害がある。

(ロ) 若し地勢の關係上何うしても其の濕地より他に適當の空地のない時は、他から乾いた土砂を運び入れるか、但しは周圍を深き溝渠として掘り下げ、その中央に土砂を盛りあげて鶏舎を作つてもよい。

(ハ) 如何なる場合に於ても鶏糞を澤山に堆積さしてはならない。不潔は鶏の病氣を誘導せしめる原因の主要なるものである。傳染性の病鶏の多いのは必ず此の鶏舎の不衛生的設備と掃除の行届かぬに起るものである。

(ニ) 全て他鶏に比較して變つた徴候を呈したり硬軟の糞便、又は多少色彩の異つた糞は決して等閑に附してはならない。

(ホ) 病鶏は、これを他鶏と隔離するのは勿論、必ず晝間は日光の當る砂上に遊ばし、風雨が強ければ外に出さず、鶏舎の中で安靜さして手當てを講じてやらねばならぬ。

(ヘ) 病鶏の餌料、清水は注意して與へねばならぬ。これを等閑に附すると却つて病症を重くし、助長せしめるものである。

(四) 鶏病の種類

鶏病と言つても、啻に鶏に限つて起る特別の病源はない。殆ど家禽全部を通じての病症

であるから、後説の小鳥の場合も同じものであることを忘れてはならない。たゞ小鳥の場合は、鶏に比して其の體軀が少さいのと、飼養の目的が、賞玩に重きを置くから、羽毛の光澤とか鳴き聲の異變とか、極めて特別の場合が多い。それで併せてこれを詳説することは至難であるから、十分にこの方面の理解をもたねばならない。要は應用するその人の才能に依つて大變な異同が生じるのであるから……。

それで鶏病はまづそれを詳細に説明すると約五十種に近い病名がある。これを類例して三種の傾向に分類すると、

(一)傳染病　(二)寄生病　(三)局所病

となる、即ち傳染病は讀んで文字の如く、他に傳播する厄介なもので、殊に養鶏家の一番惧しい病性である。(二)の寄生病は、鶏の體質に附隨する厄介病である。(三)は鶏の局部的に起る病症である。そして此の局所病には又、五種の病質に分類される。

(イ)神經病　(ロ)消化器病　(ハ)呼吸器病
(ニ)生殖器病　(ホ)運動器病

右の如く細別すると、一寸專門家でない限りは其の病源を突きとめて、如何なる病系統であるかを認知するのに困難の様であるが、永い間の經驗上は比較的容易に、その病源を看破することが出來得るものである。それで左に病種によつて細別してみやう。

□傳染病系

(一)虎疫病　(二)炭疽病　(三)結核病
(四)實扶的里亞病　(五)白癬病　(六)狂犬病
(七)流行性鶯の瘡

□寄生虫病系

(一)張嘴病　(二)蟐虫病　(三)吸虫病
(四)皮虫病　(五)疥癬病　(六)羽虱病
(七)内臓寄生虫病

□局所病系

(一)神經病　(二)消化器病　(三)呼吸器病

(四)生殖器病
□神經病系
(イ)腦卒中
□消化器病系
(イ)嗉囊食滯
(ロ)前胃炎
(ハ)消化不良
(ニ)下痢
□呼吸器病系
(イ)鼻腔加答兒
(ロ)氣管枝加答兒
(ハ)氣管枝炎
(ニ)肺炎
(ホ)惡性加答兒
(ヘ)ピップ
□生殖器病系
(イ)軟卵
(ロ)卵秘症
(ハ)輸卵管炎症
(ニ)同管脫出
□運動器病系

(五)運動器病
(イ)脚痿弱
(ロ)痛風
(ハ)僂麻質斯
(ニ)蹶球挫傷
(ホ)痙攣症

(五)病鷄の屠殺

これは可なり慘酷な樣であるが、營利を目的とするなれば、多少無情の感みはないことはないが、病鷄を屠殺する方が、安全であり後顧の患ひがないものである。これに就て養鷄の大家長谷川氏に高說がある。左に……

家禽の疾病に關しては其專門に屬する著書は尠からず、又事業者中には此等に對しての經驗も多かるべしと信ずれども余が二十年間の經過中に鑑みれば左のみ異容の病氣もないものにて唯恐るべきは惡性加答兒病である。余の其實驗談は該病の項下に述ぶることゝ爲うが角も角彼等の疾病は治し難きものなるのみならず骨折つて治療するまでの價値もないものである。

故に鷄類の疾病に罹りしものあらば天下一品の優物ならばいざしらず、他に又得らるゝ普

通のものならば一も二もなく屠殺して後患を絶つのが一大得策である、經驗乏しき治療なぞを試むるは災害を多大ならしむる基源となるのである、殊に家禽の疾病は概して傳染性を有して居るものと云ても過言でない、縱し傳染性の疾病にあらずとも人間の如うに患者から病を告げ、治療を受けに出て來るといふやうなればまだしもなれど疾病を發見するのも此方、逃げる奴を捉へて治療するも此方であるから迚も手の届きさうなことはない、何でも疾病とみたならば屠殺するに限るのである。家禽の病院は屠殺場であると心得たならば疾病のために大失敗するやうのことは無からうと思ふ。

（1）コレラ病

養鷄にとつて一番恐ろしいのは此のコレラ病である。これが傳染をやると殆ど一局地の鷄をして全滅せしめる位ひの危險症であるから、各養鷄もこの病症に就ては、いろ〳〵の研究を怠らぬ樣である。それでまづ、各專門家の苦心研究を參考として引要することにせう。

▲徵候　沈鬱倦怠の狀を現はし運動を好まず翼尾を垂れ頸首を縮め總身を屈めて物蔭や室内の一隅に佇立し著しく勢力の虛脫するを常とす、而して同患互に集團し且苦悶の爲め地を搔きさらふものもある、食慾は全く歇むなれども渴を興して水を頻りに飲む、又初期に於て既に下痢を發して水に硫黃華を和したる如うの痢便を漏らし漸く白色の粘液となり遂に米甘汁の如きものに泡沫を混え或は血液の交るものありて惡臭を放つ、口中には白色透明の液を充たし、肉冠は黑色に變じて一方に傾倒して仕舞ひ、實に哀れなる姿となり昏睡狀態に陷りて終に斃れるのである。

▲誘因　天候の陰濕なること、空氣の流通惡しき鷄舍に棲息すること、飲水の不潔なること、食餌の粗惡なること、等は發病の原因として、而して本病に罹り易いのは若齡、肥滿居常、健康なるものに多くあつて而かも經過早くして斃る、流行時期は三四月頃の就巢盛んなるとき、酷熱の候、霖雨の時期である。

▲治療法　疾病とあれば何者に對しても治療法は出來て居るには相違なきも恁る劇烈なる病症にては恐らく療法の施すべき暇のあるものでない、縱し偶に治癒した處でそれは僥

倖であつて療法の適中したものとは云はれない、一朝侵入せしならば前陳の通り直に屠殺して根底より撲滅方針をとるのが良策である。近來血清療法も唱導されてをれども是とて果して有効であるか何うか、よし有効であるとしても、これは專門家にあることにて、吾人實業者の到底學び得ることではない。

二三調劑法をあぐれば。

蕃椒末	二分	精製白亞	二分
木炭末	一分	健智亞那根末	一分

右を混和して豚脂にて丸劑として內服せしむ。

又別法としては

蕃椒末	二、〇	樟腦末	一、〇
阿片末	四、〇	大黃末	三、〇

右混和丸劑二十粒として一回一粒宛內服せしむ。

又一法

大黃丁幾	四、〇	樟腦精	一〇、〇
阿片丁幾	二十滴		

右混和每回六滴乃至八滴宛一茶匙の水に和して服用せしむ。

▲豫防法　本病流行の兆あらば其發生地方と交通を絶ち、雞舍は勿論運動場其他總ての器具を一層清潔ならしめ、空氣の流通をよくし、室內を乾燥せしめ、暑氣の候にあつては日光の直射を避け、飲食は極めて新鮮なるものを用ひ、綠草其他の副食物は不斷給與して任意に啄むことを得せしめ、柵飼のものは時々柵外に放つて隨意の運動をとらしめ、暴風雨の襲ひ來るあらば舍內に收容して直接に觸るゝことを避けしむる等のことを要す。

死體は燒棄するを良法とす、若し然らざるときは地下深く埋却するを要す、萬一死體の處置が緩慢であつたならば屹度傳播するに相違ない、又病鷄に觸れたる器具も燒棄せねばならぬ。本病に罹りたるものの肉は、人類其他犬猫の食するとも有害にならずといふことは一定して居るやうである。併し食したる其のものは、よし有害でなくとも羽毛骨片臓腑等の遺物より不慮の蔓延を來たすやうのことがないとも限らないから尙且つ燒棄する方が安全である。（養鷄法より）

私の經驗では極く簡單に之れが治療の目的を達したことがある。これは毎日與へる玉蜀黍粉の中へ、明礬液を匙で二三杯宛混入して與へたら、病氣の經過もよく、又他の鷄にも傳染しなかつたのである。

それで若し斯やうな病鷄を出した時は、無論其の鷄舍のあとの掃除を十分にせねばならない。それには硫黄をくすべるが一番よろしいし、少時は絶對に空舍として、他の鷄を入れない樣に注意するのが肝要である。

塒の中を豚脂と石油とを混和した液で十分に拭きとること。そして其の鷄の砂浴した砂の中は改めて日光消毒をなし、これも硫黄の細末を混じるとよい。藁や莚の樣な敷ものは全部燒却するが安全である。若し使用するにしても適當の消毒法を怠つてはならない。

これを要するに、第一寒冒症にかゝるからこの病源を發するのであると思ふ。それで何うしても鷄舍の乾燥を期しねばならぬ。とは時々鷄の日常の健康を必須條件として、例のドングラス混和劑を與へるがよからう。これを製するには、

綠礬	八オンス	水
二ガロン	硫酸	一オンス

を陶器又は硝子製の器物で混和するのである。決して金屬性のものを用ひてはならない。これが出來上ると、一パイントに就て一と匙の比例で、清水に加へて毎日の飲料に使用するのである。これは飲料水に鐵分を與へるよりは未だ一層の健康劑となるもので、一方滋養と消化を併有するから効果も、もつと大である。

（2）炭疽

▲徵候　この病氣に罹ると鷄は、だん〳〵鷄冠が黑色になつて、皮膚に紫色の斑點ができて腫れてくる。又別に赤茶色を呈する症狀もある。その腫物からは、順々に羽毛が脱落して、遂にみすぼらしい形態のまゝで斃死して了ふ。

▲原因　これも一種の徵菌性であつて、大抵は濕氣とか不潔から來るものである。殊に激しい寒暑の差違ある場合は注意してかゝらぬと發病する。

▲治療法　初期の間ならば下劑として、甘汞、又は比麻子油を小量づゝ與へてもよい。少し重態なれば、石炭酸を飲料水へ極く少こし混入して自由に飲ませる樣にする。その他は刺戟性のもの、例へば酒精、又は唐辛子水などを與へても効果はある。

▲豫防法　まづ何れの場合でも鷄舍の清潔と空氣の流通をよくすることは申すまでもないそれに飲料水を吟味せなければならない。大體この病症は、主として牛馬から傳染することが多いから、特に馬小屋とか牛小屋が附近にあれば、適當の留意を必要とする。若し發生した場合は、鷄は屠殺するか亦は隔離して、一切の藥杯と共に燒却せなければいけぬ決して食用として鷄肉を供してはならぬ。

（3）結核

この病氣も困つたもので、人間と同じく手當てをしても、大抵は初期を外れては斃れるものである。

▲徴候　初期の間は何んとなしに不活潑で、いじけて見へるが、だん〳〵重くなるにつれ羽毛は光澤を失なふて、脱落しはじめ、衰弱の症は其の鷄冠にも現れて呼吸は困難となり咳嗽も頻りにでてくる。もう斯うなれば二期に入つてゐて、一寸恢復は覺束ないものである。

▲病源　これは第一に鷄舍の空氣の流通が惡いか又は日光の射し工合や土地の濕潤から起るものである。恰度人間の肺病患者が陰氣な生活や換氣の十分でない設備に住居してゐるから自然に發病するのと同じ理由である。一方には健康體を阻害する粗食又は荒食の結果も影響してゐるのは當然である。

▲療法　初期の間に發見した時は小麥粉を肝油で練つて常食に與へてみると、非常に能い經過であつたさうである。が、大體に於ては該病の徴候の歴然たる時は、やはり暖い室とか運動場を選んで、そこで適度の運動を自由にさしてやり、消化しやすい滋養物を攝取ねばならない。それで氣永く保養さしてやれば初期の患者は必ず快癒する。然し自然に衰弱症が加はつてくれば、それは到底人力の治療では覺束ない、まづ天命を俟つか、それとも早く屠殺して了ふに限る。然しこの肉も食用には絶對的に供せられぬ。

(4) ジフテリヤ

本病に眞性實扶的里亞、簇蟲性實扶的里亞、の二症ありて人類にも獸類にも又家禽にもある。而して單純に發生する病氣でなく種々の病源に依て發生するのである。

▲眞性實扶的里亞の徵候　鼻腔、眼瞼、眼窠內、口窩、咽喉、氣管、氣管枝、或は內部の肺、胃腸、等を侵すものにて、其患部の位置も異なるに依て症候も一樣にはならぬが其各部面の粘膜より侵し始むるだけは一定して居る、而して何れの部面を侵すにもせよ其患部は潮紅して時間を經るに從ふて滲漏液を生じ漸く增加し其表面は乾きて一種粘稠乾酪樣の被膜を生じ其被膜を除脫すれば粘膜露出して潮紅甚だしく中には出血するのもある。呼吸器より來るものは鼻腔は滲漏物に充され呼吸困難となり、眼よりするものは眼瞼腫れて顏面變形し飲食の嚥下にも困しみ、又氣道粘膜より來れば呼吸困難となりて嘴を張り、喘鳴を聽き、咳嗽すれば粘稠したる鐵色の痰を吐くものである。

本病の初期は多〳〵腸加答兒にありて漸く增進して本病に移る、故に病鷄は初發より疲勞倦怠の伏を顯はして來る、從つて羽毛の光澤は著しく失ふて仕舞ふ、而して症は、大概緩慢である。

▲療法

胡桃葉煎一〇〇〇、〇　　倔里設林二〇、〇
撒里迭兒酸〇、五　　鹽酸加留謨五、〇
強酒精一五、〇

右を溶解して毎日一二回毎回一茶匙宛を內服せしめ且二三回患部に塗る。

▲豫防法　豫防法は虎列刺病や炭疽病の豫防法と異なることはない、即ち彼れに依て豫防するのである。（養鷄法所載）

(5) 魯布病

▲徵候　この病氣も又傳染性である。やゝ病症がジフテリヤに似てゐるので、往々〳〵間違ひ易い。まづ最初は食慾がすゝまず、いつも餌があまつてくる。鼻や眼からは惡臭のある粘液がでる、そして肺病に似たやうな咳が出だして苦しい呼吸狀態となるのが普通の經過

である。これが初期なれば再發しないこともないが面部に腫れがまはつて、眼瞼を閉じる樣になれば、大抵は斃死する。

▲原因　第一に黴菌を以て發生するのであるが、よく續發する時は、必ず天候の不順より來る鷄舍の設備の不完全に歸因する。即ち梅雨時の雨漏りとか、又は雨續きの日に、水のはけ口が惡くて、鷄舍の底土を襲ふたりした時には、きつと此の徴候のある鷄が續出するまづ普通は冷込みと思へばよい。

▲治療　この鷄もやはり隔離して、消毒は勿論、空氣の流通をよくするのと、鷄舍内を乾燥することを忘れてはならぬ。

初期の手當てとしては、唐辛子を少量と舍利鹽の混和劑を調合して與へてもよい。舍利鹽は一と匙位ひの割合でよい。

或は、一日に二三回位、コロム曹達か、六十倍の石炭酸で、患部の腫れたところを丁寧に洗つてやるがよい。尤も鷄には消化のよい滋養分を與へなければならぬ。

（6）白癬病

▲徴候　これも傳染性皮膚病である。人間にも此の病はよくあるものであるが、就中鷄に多い。その鷄冠や面部、又は次第に皮膚全部に漫延して、一見しても汚ない感じのする病氣である。これ程鷄にとつて災難の甚しい病症は少ない。ジリ〳〵と衰弱して遂に斃れねばならぬからである。

▲治療　この病症には塗布劑を用ひるより外に適法がない。まづブツ〳〵と出てゐる患部に油か或は軟石鹼の汁をすり込んでやつて、約二十四時間内外を經過すると、患部がギロ〳〵になつて脱落する。その時分に温湯で洗つてやり、然る後に昇汞水かホーレル水で一日二三回乃至五六回は洗滌してやり、そのあとへ硫黄軟膏を塗擦してやると、大抵は快癒する。

▲豫防　この病鷄は直ちに隔離して、決して一群に於てはならぬ。よく素人はこの病氣を輕視するものであるが、これは能くない。早く快癒させないと、産卵用にも肉用にもなら

ぬし、時機を忘れては却つて斃れさして了ふやうなものであるから十分の手當てを必要とする。鷄舍の清潔や燒却は他の傳染病の場合と同じ程度になさねばならぬ。

（7）鷄痘

鷄痘は主に秋に起り、專ら若鷄や雛に多い樣で、病氣になつたものは大抵六七割も斃れるものである。

▲病徵　冠、顏面、脚等に小豆大の黑色の瘡が出來て、之れが次第に廣がつて、遂には身體全體に出來、口內咽喉までも出來る樣になる。

この瘡は出來てから十日間位の間に、十分に腫れて來ると、中が凹んで之れがすれて潰れたり、又鷄が搔いたりすると、黃色な汁が出る。これも少ない時は大した害もないが病氣が主くなると、甚だしく衰弱して、遂に斃れるものである。

▲原因　これもやはり黴菌の傳染である。それ故この病氣の發生した場合には、隔離と消毒は忘れてはならぬ。又此の病氣は人間のマラリヤ熱の樣に蚊の媒介で傳染するのである即ち此の病氣に罹つた鷄を刺した蚊が他の健康な鷄を刺すと、そこで病氣は傳染するのである。

夫れ故病鷄は是非隔離せなければならないのである。

▲治療　此病氣に罹つた鷄を隔離すると同時に、殘りの健康な鷄にも、カルヽス泉鹽、或は舍利塩を與へ、尙病鷄には强壯劑を與へ、又痘瘡の所へは沃度丁幾、硫黃軟膏、石炭酸軟膏等を塗つてやればよい。

又雛の頭や顏に出來た時には、カレシンの二十倍、或は石炭酸十滴程を約三合程に溶かして海綿に浸して洗つてやればよい。

又痘瘡が眼瞼に出來た時には、捨て置くと眼が潰ぶれる虞れがあるから、硼酸水で洗つて、瘡を取り去りプタルコール十倍液を塗り尙プロタールコール一二滴を眼の中に差すが好い、又鼻及口腔內に出來た時は過酸化水素で洗へば好い。（山本農學士）

（8）狂犬病

▲徵候　これも人間の狂犬病と同じく、犬に咬まれて發病する、尤も危險な不治の病疾である。最初は何にかしら不安さうに、キョロ〳〵したり、又は何事もないに愕いて飛翔したり、ちつとも安靜の出來ない容體をする。時には人間に飛びついたり、不意に住家へ飛び込んで驚かすことがある。これらは明かに該病に襲れてゐるもので、病勢がすすむに從ふて、自然にフラ〳〵とした步調になり、遂にばつたり斃れて了ふ。大抵發病以來三四日で死ぬと覺悟せねばならぬ。

▲治療　今のところではまづ適當の治療法がない。まづ本病として確實に症狀のある時はいち早く屠殺するに限る。肉は無論食用にならぬ。

大體本病は、犬に咬まれてから、何日位ひで發病するのか今のところでは適確に知るよしがない。それで或は潛伏期を三十日と稱し又人によると一年間も潛伏するものであるといふが實際は不明といふのが適當である。故に、該病は不治として適當に處斷するのが良策である。

(9) 赤痢病

▲徵候　これも傳染性であることは無論であるが、最初の間は不活潑であり、食餌がすゝまぬ。そして自然に鷄舍の隅とか又は他の鷄群から避けて思案さうに首を垂れたりする、尤も重態に瀕してくると、不痢症に血を混じてくる。これが最後には、鷄類の腸のやうなものに化つてくると、大抵は斃れるものである。

▲原因　徵菌が原因であることは知れてゐるが、やはり食料の粗末、飲料水の不潔から生じるものである。

▲治療　病鷄は隔離して、鷄舍内の清潔を保ち、適度の消毒をする。糞は他のところへ深く埋めるか又は石灰を以て消毒せなければならぬ。

(10) 鵞口瘡

▲徵候　これは流行性であるし、病原は主に牛馬や豚から傳染するやうであるから、鷄群

を接近さしてはならぬ。著しい病徵は、鼻孔緣、口腔、眼結膜又は肉冠髯に水泡が發生し、その水泡がくずれて了ふと、恰度爛れた火傷のやうなものにある。若しこれが脚に傳染すると、無論其の疼痛で歩行は困難となり、發熱も激しくなるものである。

▲療法　日當りのよいところへ隔離するか、又は適當な乾いた場所を選んで籠伏となし、絶對に安靜を與へてやる。そして患部には、明礬水を薄く溶いたのを塗抹してやるとよい。

(11) 張嘴病

▲徵候　これは寄生虫が氣管内に發生するから病根となり、嘴を張つて嘔吐を催ふす樣になり、棄てておくと必ず鷄を斃すから等閑にできない。

▲治療　これは寄生虫を體内で殺して了はねばならぬから、適當の殺虫劑を與へるに限る或は煙草を燻蒸さして、虫も吐き出さしめる方法もある。

(12) 蟐虫

▲徵候　雛時代にこの病氣にかゝると非常に發育が遲れる。著しい該病の徵候としては、まず不活潑である。そして多數蟐虫が寄生した時は、そのために下痢症に變じる。

▲治療　普通、檳榔子の細末を三グラム許りを、牛酪と混和して内服せしめると効果がある。

(13) 吸虫

▲徵候　これは腸、盲腸内に寄生するもので非常に衰弱さすものである。卽ち鷄の喰ふ、營養分を全部内部から失敬して了ふからである。最初少こしく下痢し、衰弱性を加へてくると大抵この寄生虫である。

▲治療　まづ比麻子油を二匙位ひ與へると大抵は効果がある。

(14) 前胃炎

▲徵候　この病根は多食するから發生するのである。それで普通の病鷄の樣に食餌を攝らないが、殊に硬いものを厭ひ出す、擧動が不活潑となり、ぢつと屈托相に頭をさげて動かなくなつて大抵は死す。だからまづ不消化物を多く食つたのが原因と思へばよい。

▲治療　輕症であれば、水二合に重曹五グラムを混せ、それを適當の飲料水に混入して與へればよい。重態になると、まづ胡麻油を一時間に二三回位ひやつてもよい。

(15) 疥癬

脚部、頭部に寄生し殊に冠を侵し易い。最初に於ては顯著なる症候はみないが只侵されたる鷄は頭部ならば頭を搖り、脚部なれば脚を不意にあぐる位に止まるものである。

▲頭部に寄生せるものは頭冠の基部に白色の班點にて雁字形又は圓形線を顯はし、軟かなる痂を被むる。此痂を脫離して檢すれば、皮膚は厚くなりて褐色を呈してゐる。而して二十日三十日を經過すれば其患部は腫脹して病鷄は頻りに頭を振搖し漸やく患部增大して而して其局部の羽毛は頓に光澤を失ひ、且つ彎曲捲縮して遂に脫落し、肉冠はいよ〳〵腫脹して彎形となり、褐色を呈し、其の表面には白色なる糠のやうなる鱗片を附着して痂は頸より嘴迄に蔓延するものである。

▲脚部に寄生せしものは最初は趾根、趾間等に鱗屑樣の糠疹を生じ時日の經過と共に增大して黃色を呈す、一ケ月以上も經過すれば患部の鱗狀上皮は脫離して痂は益々厚くなり灰白色或は帶褐暗色を呈するものである。

又時としては頭部に發したるものの漸次降下して頸部背部を侵し、脚部に發したるものは上登して胸部まで侵すこともある、此侵されたる部分は忽ち羽毛の光澤を失ひ尖端捲縮彎曲して必ず其徵候を呈するものである。

雞舍を掃除せし後なぞに手頸指間等に劇甚なる瘡痒を覺ゆることがある、之れは卽ち此寄生虫が傳染寄生したのである、故に恁ることのあるならば雞舍全部に對して嚴重なる殺蟲的大清潔を執行せねばならぬ、又此際の塵芥其他の物總てを燒棄するのが必

要である。

▲療法　患部に水銀軟膏を塗り又はペンジン仁油を混和して擦込むのがよい。

又一法として、

硫黄華	二分	家猪脂	八分
炭酸加里	二分		

右を混和軟膏と爲して塗るもよろしい、併し此種の塗抹劑は脚部の如き嘴の及ぶ處にては必ず包帶する方がよい。

又一法

微溫湯にて患部を十分に濕らし精々痂皮を除去して硫黄軟膏を塗擦するもよろしい。因に地方に依て俗に糞黴れと稱へつゝある脚部腫脹して見苦しき容體して居るのは皆此疥癬病である、我福井縣下の如きは非常に蔓延して品評會の出品中にすら十中八九までは該病に罹つて居る、是畢竟鷄舍の不潔より蕃殖したものである。

(16) 卵秘症

▲徵候　この病症はまづ卵を產まんとする模樣があつて、頻りに臀部を下げるが、何うしても產卵ができない。そして非常に苦痛をうつたゑるものであるが、重症に因ると時に二三日で斃れることがある。これは俗にいふ二つ卵を產んだり、脂肪過多によつて原因するものである。

▲治療　臀部の羽毛を除いて、その羽毛の尖端にグリセリンか或はオリーブ油を浸して鷄の尻より、卵道へ挿入してやるのである。然し、無理に押し込んでは、却つて卵を破壞して鷄の命をとることがある。長短の模樣を注意せねばならぬ。

(17) 眩暈病

▲徵候　これは重症になると飛翔せんとして却つて飛ぶこと能はず顚倒するものである普通には極めて焦慮する不安性となり、その邊を旋回轉走する。

▲原因　營養過多で、頭部に血液が滯積するから發す。多血性、脂肪性の多い鷄は罹り易い。

▲治療　何んでもないことではあるが、頭部を冷水で冷やしてやるが一番効果があるやうである。

(18) 肝臓肥大病

▲徴候　不活潑狀態より、食事を攝ることがもの憂い樣になる。それで此の病症の特徴としては死後非常に肝臓が肥大する。

▲原因　大抵は運動不足か又は不消化物を多量に攝取したことに發す。

▲治療　餘り硬くない食料を與へることと、副食物として青菜を刻んで與へるのを忘れてはならぬ。そして藥を内服せしめるには、まづ舍利塩を淡く溶解した飲料水を與へるがよからう。

(19) ビッブ

▲徴候　これは呼吸器病から發生するもので舌の表面に、固い角質のものが發生して、乾からびてくるのである。時によつては充血し又は多量に出血することがある。從つて舌の機能を失なうから、自然に食事が攝れないので衰弱する。

▲治療　舌が乾いたのなれば、一日に數回程、グリスリンを塗布してやる。若し血の出た時は鹽酸加里液の五十倍を以て、患部を洗滌してやるがよい。

(20) 氣管支炎

▲徴候　咳を苦しさうに出すに從つて、粘汁が增し、次第に衰へてくる。これは不順の時か、氣候が激變した時に、冷氣を感じて發生するものである。

▲治療　初期の間に必ず温い鷄舍へ收容してやると大抵藥をのまなくても恢復する。もしだん〳〵重症に赴く樣であれば、サルチル酸又は硫化石灰を三グラム許り一日に二三度内服させればよい。

(21) 鼻カタル

▲徵候　全じく冷氣より發する病ひで、擧動不活潑となり、頭を垂てはよろ〳〵とし、水鼻汁を始終出してゐる、時にはくさみ、或は苦しい吐息をする。

▲治療　激烈な流行性でなければ、まづ温暖な鷄舍へ收容して、サルチル酸か、又はアンチピリンを適度に與へるがよい。分量はまづ人間の一日分を二日乃至二日半位ひに服藥せしめるがよい。

流行性のもので、鼻や口や眼から粘液を多量に出して、非常に呼吸苦しい場合は、三十倍の過酸化水素で洗つてやる。そして少こし服藥の分量を增してもよい。

猶ほ左の別法を二三參考にしておかう。

木炭末	三分	酵母	三分
小硫黃華	二分		

右を丸藥として一日に三回服藥せしむ。

同別法

硫酸鐵	一瓦	過尼子	一瓦
ビメント	三瓦		

右を丸藥として一日に二回服藥せしむ。

(22) ルーブ（惡性カタル）

▲徵候　本病は鷄病の中で尤も恐るべき種類の一つであつて、劇烈なる鼻腔加答兒と殆ど同一である。最初期には鼻腔より水液を漏出し、暫時にして一種不透明の惡臭を有する鼻液となり。それが乾病して鼻孔を閉塞して呼吸の困難を生ず、內眦に泡沫を浮べ、眼瞼腫脹す。劇症にては顏面一體に腫脹して、ために明を失ふて食を採ることも出來ないで、倦怠沈靜の狀を顯はし遂に斃死するものである。

何處の養鷄場にても不管理にして多數を飼養する所には、大概此病氣に罹つたのが居る故に尤も注意を拂ふべき病症である。

左に某學者の一說を紹介しやう。曰く。

本病は鼻粘膜の急性炎性より、粘膜發炎すれば、腫起膨大して熾んに粘液を分泌す、元來狹少の鼻孔は之れがため益々狹隘となり、呼吸不利を致す、內眦に浮べる泡沫も亦同一の原因より生ず、乃ち呼吸自在に鼻孔より出づる能はず鬱つて淚管を上り內眦に來りて遂

に泡沫となる、重症に於ては粘液鼻腔を充たし外口閉塞するが爲め漏出するに途なく遂に顏面兩側の腫脹を發す。

本病の傳染性あるは疑を容れず、甚だしきは病禽と器を同ふして飲食したる健鳥が病を發すと。

▲原因　種々ある如うなれども矢張り冷濕冒觸、換氣の不良、氣候劇變に誘因し、而して經過は二三週間より二三ヶ月間にも亘るものもある。

▲療法　乾燥したる溫暖なる舍内に移し衝動をさけ滋養の食餌を給し獨房に靜養せしむれば著しく治癒を促し頗る効顯あるものである。

微溫湯に醋を加へ又は稀薄なる石炭酸水、又は昇汞水を以て頻々眼の周圍なり鼻端なりに凝着してゐる汚物を洗除すれば輕快を感ず。

コバーバルサムの子殼を毎日一二個宛内服せしむるも効あり。

投劑は

桂皮　四分一磅　乾姜　二匁　蕃椒　四分一匁　丁香　半匁

右を混和細末として毎回半茶匙を取り護謨漿、糖蜜、蜂蜜、若しくは、澱粉に和して内服す。併し本劑にて良効を得んには必ず良食暖室の靜養を併用せなくては奏効せない。

又一法として、

蕃椒、精製白堊、の等分量を混和丸劑と爲して服用せしめ、又喘鳴あるものには毎夕肝油一食匙宛を内服せしむ。

要するに其病禽にして特に貴重なる種禽であつて若し亡へば他に再び購ふの途なきものならば兎に角否らざるものならば彼是治療の爲めに日時を經過せんよりは寧ろ屠殺して病毒を絶つの勝れるに如くことはない、彼れが鼻孔より漏出する粘液を自ら振搖して忽ち病毒を撒布するのであるから全部の鷄群に傳播して遂に救ふべからざる巨大の損害を蒙ることとなる。（養鷄法より）

（23）ケーブ

▲徵候　終始口を開いて咳を發し、鼻及口からは粘い汁を出して頻りに頭を振つて、眼を

閉じた儘でぢつと立ちて、次第に衰弱し遂に斃死するのである。

▲原因　は或る微生虫の寄生に依るもので、普通之れをケープ虫といひます、此れは此「ケープ」虫に依つて傳染するものであるから、此ケープ病の發生した鷄舍は能く消毒せなければならぬ。

此ケープ虫が寄生すると、咳或はくさめをする時にケープ或は其卵が地上に吐き出されるので、之れを拾つて喰つた鷄が又ケープ病に罹るので、又鷄が喰はなくとも、蚯蚓が之れを喰ひ其の蚯蚓を鷄が喰つた時は又傳染するのである、それ故此病鷄の出た時は蚯蚓迄にも注意して居なくせなければならぬ。

▲治療法　此病氣に罹つた鷄の口を開いて見ると、小さな針の曲げた樣なものが澤山居るそこで何か羽の先き少し丈け毛を殘した物か、之に類した物でテレビン油を其患部に塗るのであるが、此際注意して行らぬと鷄の氣管を痛めて、爲に死ぬ事がある。此方法は却々面倒で然も多數の鷄には施し悪いから、小さな噴霧器を以て石油、クレオソート或は、石炭酸を氣管内へ注入するのである、其他風化石灰、硫黄華等も良い、但此方法を施こした後は塒に入れない樣に注意せねばならぬ。

この病氣に罹つた鷄は、隔離と其のあとの消毒は是非忘れてはならぬ。（山本豊次郎氏）

大正十四年九月五日印刷
大正十四年九月十日發行

【定價金六拾錢】

著作權所有

養鷄の研究

著者　副業養鷄研究會

發行者　大阪市西區西長堀南通二ノ七　脇阪要太郎

印刷者　大阪市淀川區久保吉町一丁目三九　吉田由治郎

發行所　大阪西區宇和島橋南詰　日本出版社
振替口座大阪（三四一三三）

296
175

終